



## 未来を夢見て Season 2

2021/9/7 No. 97

### 文学的教材文の文体と表現

～宮城教育大学教育学部教授（国語学） 遠藤 仁先生をお迎えして～

先月までの猛暑は嘘のように9月に入ると涼しい風が吹きはじめました。校庭の稲の実も順調に生育し、校庭にはとんぼの姿も目につくようになりました。今日は24節気の1つ白露。季節は秋に移ろうとしています。

9月6日（月）。以前から親交のある宮城教育大学の遠藤仁先生をお迎えして、校内研修会が行われました。

緊急事態宣言下であることを踏まえ会場は体育館。ソーシャルディスタンスを十分に確保して、90分間、遠藤先生のお話を全職員で傾聴することができました。

前半の言語の発達や獲得のお話から後半の「ヒロシマのうた」の遠藤先生の国語学の研究者としての分析的な視点からのお話と充実した90分間でした。

研修会后、遠藤先生が「早口な上に、ああいった内容で先生方に申し分けなかったかなあ」とおっしゃっていましたが、私は毎日現場で教材を子供に提示し続けている私たちにとっては、全職員で「教材の本質」に立ち返ることができる貴重な時間を共有できた、と思っています。

私たち小学校の教員は、毎日子供たちに全教科の教材を与え続けなければなりません。これには実は相当な教材研究の時間が必要で、それを補っているのが、主たる教材である教科書、教師用の指導書、デジタル教科書などです。私は、このことを、スーパーでお総菜を選ぶのとどこか似ているように思っています（私の個人的な印象です）。

一方、遠藤先生のお話は素材のもつ味や栄養など学問的な見地に基づいて分析され、素材の意味について説明をしてくださいました。ただ、遠藤先生もおっしゃっていたように（でも、私は子供たちに教えることはできないんですよ・・・）つまりそれは、遠藤先生は研究者であるからだと思っています。

本来「教材研究」は、素材に立ち返って価値や系統などを研究して「素材を教材に変えること」が前提ですが、それでは私たち小学校の教員はもちません。ただ、今回「ヒロシマのうた」を通して、具体的に教材の価値に触れさせていただいたように、どの教材にも学問的な価値が含まれていることを踏まえて、私たちが教材を見つめ、子供たちに提示することで、私は授業がまた少し変わるように思っています。研修会后、遠藤先生に校長室でお休みいただいていると「遠藤先生、卒業生の伊藤です」と伊藤先生がご挨拶してくださいました。その時の遠藤先生の表情が、さっきまでの大学の先生の表情から「教師」の表情の変わったのがとても印象的でした。遠藤先生のお人柄から「教育は人なり」、その言葉が浮かんできました。お忙しい中、講師をお引き受けいただいた遠藤先生、本当にありがとうございました。また、今回ご都合で拝聴できなかった先生のために。共有ドライブにVTRがアップされていますので、時間を見つけてぜひ視聴してください。

（文責：手代木）

